注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
俺が魔王であいつが勇者

【作者名】
デュランダルｖ２

【あらすじ】
すいません。完璧にバカと魔術と転生人生がぜんぜん進んでいないのですがＰＣが友達の家でしか使えないのです。ＰＳＰで５００文字で打てる物語をやっていきます。たぶん、駄文と言うより絶対になります。そして、超不定期更新＋気まぐれ更新になります。

俺が魔王!?

目覚めるとそこは知らないグェ。

「テンプレ的語りを止めやがれ」

ととても綺麗な女性に殴られた。殴られるのにはあまりなれていないし、てか本当にここは何処なんだ？

「ようやく、お目覚めになりましたか、魔王様」

あれ、今ファンタジーの代名詞的な名前が聞こえたのですけど？

「あの、すいません。今、なんていいましたか？」

「ほら、ミデナ。わかってないよ」

「しかし、トラリー。もう彼しか頼れないのよ」

なんか不穏な話してるんだが・・・

「あなたは異世界から呼び出された、この世界の魔王になれるたった一人なのです。」

もう、一度だけ聞いておこうかな。たぶん、変わらないと思うけど。せめて、聞き間違いでありたい。てか、聞き間違いだ。

「どうか、私たちの魔王として助けてください」

俺は、叫びたくなった。

「（まさか、本当になっちまうなんて⁉てか、役割違うだろうが‼）」

私が勇者!?

えっと、ここ何処だろう？

「ようやく、勇者様がやってきました」

俺はなにやら喜んでいる少女はほっといて、周りをみると三様の顔があった。さっきみたいな祝福するような連中、なにやら悩んだり話している奴等、まるで虫を見るよいなバカ共、たぶん国の官僚かなんかだと思うが、ここ何処なんだ？

「はじめまして、勇者様!!私、ロート王国の王女しています。フラウ・ユヴェリーともうします。勇者様のお名前はなんと言うのですか？」

怒濤の言葉に少し呆れた。少しはこっちにも情報くれないかな？まぁ、合わせるかな？

「私の名前は黒沢旭（くろさわ　あきら）と申します。あの、勇者と言うのはどういうことですか？」

「クロサワ・アキラさんと申されましたか？それについては説明させて頂きます。まずは、こちらにきてください、アキラ様」

そう言って別室に案内された。後ろからいろんな視線を受けながら。

姫路と料理と必殺料理人

「まぁ、こんなものか」
俺はそう言って、蒸篭から赤い卵を取り出し４種の粉を塗した。
「・・・できたのか？」
ムッツリーニは興味深そうに見ていた。大量に用意したゴウズ。それから出た血を卵型に蒸された血のデザートを使用した。料理人なら気になるだろう。
「一個食うか？」
「・・・（コクッ）」
そう頷いて、一個を食べさせてやると驚いた。
「・・・美味過ぎる。なんだ、これは⁉」
「これはなに？」
「何ですかこれは？」
島田と姫路が俺の料理を見てきた。
「どうだ、食べてみるか？どうせ味見ようだし」
１つずつ渡した。２人はそれを食べると驚いた。
「おいしい。血の味がするのに生臭くない⁉」
「とっても美味しいです」
「そうだろう。なんせ、ゴウズに真珠の粉に、ココナッツパウダー、ツバメの巣まで用意したんだ」
しかも昔見た漫画？のまねをしたがほんとうまくいったな。
「・・・作り方が全然わからない」
ムッツリーニがどんな作り方を考えていた。
「・・・これ、食べてみる？」
ムッツリーニから胡麻団子を渡された。危険信号がとても頭から発している。それを食べると口と食道、胃が溶解した。何故だろう王水と硫酸が同時に混ざったものを飲まされてる気分というよりそのものだった。
「どういうことだ。外はゴリゴリ、中はネバネバ、、王水、硫黄、硫酸

などの多数の科学薬品ばっかなんだが」
「・・・大丈夫なのか!?」
「多少は耐性があるぐらいだ」
しかし、この薬品まみれなのに胡麻団子の形状を保ってるな。しかも、無臭だから危険を感じないぞ。しかし、誰が作ったんだ？
「・・・姫路の料理だ」
「よし、絶対、作らすな。料理を」
「・・・心得てる」
その顔に恐怖と悲壮感が漂っていた。体験済みか。なら、とめろよ。そうしないと営業停止前に警察沙汰になっちまう。殺人もしくは殺人未遂で。

ＳＩＤ　ＩＮ　???

ホント、楽しそうにしてるわね。昔、あの世界（地獄）にいたときより表情豊かになってるわね。四強の中でも表情豊かだったけどまるで作られた表情にしか見えなかったけどほんの少しだけ感情が入ってる。それだけでも驚いたは。それになんでこの学校には下級、中級の中ぐらいの連中が2割もいるのかしら。私たちの代だけでも相当なのに。その下の人たちもいるのだからこの学校の特異性が疑うわ。彼もそこに目をつけていたみたいだし。
「ほんと男の意地の張り合いは見ていて楽しくもあり早く話せばいいのにツヴァイは。彼が何か隠しているのは明白なのに。あの人も馬鹿ですはね